二〇二四年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

『修士課程』　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦　書）

注意事項

1　問題冊子および解答用紙は、試験開始の合図があるまで開かないこと。

2　受験番号と氏名は、解答用紙1ページの所定の欄に記入すること。

3　問題はこのページを含めて1～7ページである。

問題一は、共通問題である。解答用紙の最初に、入学後に専攻する専門分野の選択肢が掲出してあるので、該当するものを〇で囲むこと。

問題二は、共通問題である。三つの問いに解答していない場合、問題二全体の得点はゼロとなる。

問題三は、選択問題である。日本語学、古典文学、近現代文学の三領域の中から、入学後に専攻する領域の問題を選択し、設問の指示に従って解答すること。

Ⅰ　日本語学領域　2ページ
Ⅱ　古典文学領域　3～4ページ
Ⅲ　近現代文学領域　5～7ページ

4　解答用紙は四枚表裏。1～8ページである。問題との対応は次の通り。

問題一	Ⅰ　日本語学領域	1ページ
問題二	Ⅱ　古典文学領域	1～2ページ
問題三	Ⅲ　近現代文学領域	3～4ページ
		3～4ページ
		5～8ページ

＊解答はすべて解答用紙の所定のページに記入すること。

＊設問の指示に従い、問いの番号や選択した記号を適宜明記すること。

二〇二四年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【修士課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦・横　書）

問題一〔共通問題〕

大学院修士課程においてあなたが研究しようとしているテーマや対象について、自らの構想している研究方法に触れながら、十行程度で、できるだけ具体的かつ簡潔に説明せよ。

問題二〔共通問題〕

・次のＡＢＣ群各々三問の中から、それぞれ一問ずつを選択し、各問十行程度で解答せよ。
・一般外国語で「日本語」を受験する者は、ＡＢＣのいずれか一つの群の代わりとしてＧ群の問を選択できる。
・解答の冒頭には、それぞれ選択した問の記号（Ａ１など）を明記せよ。
・三つの群の問題の中、一つの群の問題でも無回答の場合、問題二全体の得点は零となる。

【Ａ群】日本語学領域

Ａ１　「太郎は花子に殴られた。」と、「太郎は花子に泣かれた。」という文における受け身表現の違いについて説明せよ。

Ａ２　ガ行鼻音について、具体例を挙げつつ説明せよ。

Ａ３　日本語の文体と文字表記の関係について、具体例を挙げつつ説明せよ。

【Ｂ群】古典文学領域

Ｂ１　日本古典文学における文字と声（こえ）の関係について、具体例を挙げて述べよ。

Ｂ２　日本古典文学における書写文化と印刷・出版文化について、具体例を挙げて述べよ。

Ｂ３　日本古典文学作品とその注釈者について、具体例を挙げて述べよ。

【Ｃ群】近現代文学領域

Ｃ１　近現代文学と前近代の文学との関わりについて、具体的な例を挙げて論評せよ。

Ｃ２　近現代文学において身体表象はどのように変遷してきたか、具体的な例を挙げて論評せよ。

Ｃ３　近現代文学において性と差別の問題はどのように議論することができるか、具体的な例を挙げて論評せよ。

【Ｇ群】一般外国語で「日本語」を受験する者のみ、右のＡＢＣ群の中の一つの群の代わりとして選択できる問題。

Ｇ１　あなたの研究する「日本語学」または「日本文学」という学問分野について、代表的な論文・研究書または研究者名を具体的に挙げて説明せよ。

問題三〔選択問題〕ⅠⅡⅢから一領域を選択解答せよ。

Ⅰ　日本語学領域

１　各自の関心がある研究領域において、資料（データ）を取り扱う上で留意すべきことがらを具体的に述べよ。

２　次のＡ～Ｆから三題を選び、解答せよ。解答の冒頭にその記号を明記すること。

Ａ　日本語の拍構造と特殊拍との関係について知るところを述べよ。

Ｂ　日本語の方言分布について、周圏論的解釈に対して「逆周圏論」ということが言われる。それについて知るところを述べよ。

Ｃ　日本語の文法的表現における価値評価性について論じよ。

Ｄ　"relevance"について知るところを述べよ。

Ｅ　濁点の歴史について知るところを述べよ。

Ｆ　漢字字義の変容について知るところを述べよ。

二〇二四年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題
【修士課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦・横　書）

Ⅱ　古典文学領域

（一）次に掲げる語群い～うの中から二つを選び、それぞれについて要領よく説明せよ（一題につき五行程度）。解答の冒頭には、選んだ記号とその語とを明記すること。

い　相聞　　ろ　山部赤人　　は　常陸国風土記　　に　稲羽の素兎
ほ　藤原仲忠　　へ　三巻本枕草子　　と　栄花物語　　ち　秋山虔
り　古今和歌六帖　　ぬ　能因法師　　る　新勅撰和歌集　　を　心敬
わ　今昔物語集　　か　覚一本平家物語　　よ　二条良基　　た　福富草紙
れ　与謝蕪村　　そ　曲亭馬琴　　つ　狂歌　　ね　洒落本
な　遊仙窟　　ら　大江匡衡　　む　唐大和上東征伝　　う　玉篇

（二）次のA～Iの中から一題を選び、論述せよ（二十行程度）。

A　山上憶良の人生と文学活動。
B　『古事記』神話・説話と東国。
C　和歌贈答の機制。
D　日記文学の虚構性。
E　京極派の歌風。
F　慈光寺本承久記の特徴と評価。
G　『冬の日』。
H　『椿説弓張月』。
I　幼学書について。

二〇二四年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題
【修士課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦・横　書）

（三）次のア～キの中から一つ選び、本文の直後の（　）内の指示に従って解答せよ。

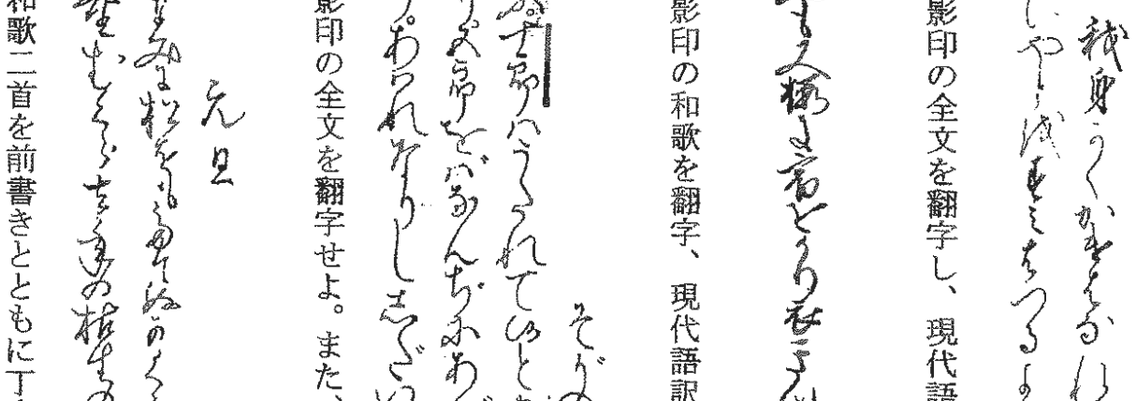
（ア）**験無物乎不念者一杯乃濁酒乎可飲有良師**

（右をすべて平仮名で書き下し、現代語訳せよ。）

（イ）**天地初発之時於高天原成神名天之御中主神**

（右をすべて平仮名で書き下し、現代語訳せよ。）

（ウ）



（右の影印の全文を翻字し、現代語訳せよ。）

※Web掲載に際し、左のとおり出典を追記しております。
国立歴史民俗博物館所蔵

（エ）

（右の影印の和歌を翻字、現代語訳し、本歌または本説を指摘せよ。）

（オ）

（右の影印の全文を翻字せよ。また、傍線を付した二名の姓名を兄・弟の順に記せ。）

（カ）

（右の和歌二首を前書きとともに丁寧に翻字して、その後にどちらか一首を選んで、和歌のみを解釈せよ。）

（キ）

（右の影印の全文を翻字し、現代語訳せよ。）

※Web掲載に際し、左のとおり出典を追記しております。
天理大学附属天理図書館蔵
『天理図書館善本叢書　和書之部　第二十七巻』所収
「日本書紀纂疏」，八木書店，1977

二〇二四年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【修士課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦　書）

Ⅲ　近現代文学領域

（一）次のＡ１～２、Ｂ１～２は、日本の近現代文学の代表的な作品の一節である。これら四つについて、①用語・文体・語りの方法など表現上の特色、②その作品の文学性や文学史的意味・文学者の生涯における位置、の両面から、自由に論ぜよ。

Ａ１　田山花袋「田舎教師」

一

四里の道は長かつた。其間に青縞の市の立つ羽生の町があつた。田圃にはげんげが咲き豪家の垣からは八重桜が散りこぼれた。赤い蹴出を出した田舎の姐さんがをり〳〵通つた。

羽生からは車に乗つた。母親が徹夜して縫つて呉れた木綿の三紋の羽織に新調のメリンスの兵児帯、車夫は色の褪せた毛布を袴の上にかけて、梶棒を上げた。何となく胸が躍つた。

清三の前には、新しい生活がひろげられて居た。何んな生活でも新しい生活には意味があり希望があるやうに思はれる。五年間の中学校生活、行田から熊谷まで三里の路を朝早く小倉服着て通つたこともう過去になつた。卒業式、卒業の祝宴、初めて席に侍る芸妓なるものの嬌態にも接すれば、平生難かしい顔をして居る教員が銅鑼声を張上げて調子外れの唄をうたつたのをも聞いた。一月二月と経つ中に、学校の窓から覗いた人生と実際の人生とは何処となく違つて居るやうな気が段々して来た。第一に、父母からして既にさうである。それは周囲の人々の自分に対する言葉の中にもそれが見える。常に往来して居る友人の群の空気もそれ〴〵に変つた。

ふと思ひ出した。

十日ほど前、親友の加藤郁治と熊谷から歩いて帰つて来る途中で、文学のことやら将来のことやら恋のことやらを話した。二人は一少女に対するある友人の関係に就いて先づ語つた。

「さうして見ると、先生中々御執心なんだねえ」

「御執心以上さ！」と郁治は笑つた。

「此間まではそんな様子が少しも無かつたから、何でも無いと思つて居たのさ、現に此間も、『大に悟つた』ツて言ふから、ラヴの為に一身上の希望を捨ててはつまらないと思つて、それであきらめたのかと思つたら、正反対だツたんだね」

「さうさ」

「不思議だねえ」

「此間、手紙を寄越して、『余も卿等の余のラヴの為に力を貸せしを謝す、余は初めて恋の物うきを知れり、しかして今は此ラヴの進み進まんを願へり、Physical なしに』なんて言つて来たよ」

この Physical なしにといふ言葉は、清三に一種の刺戟を与へた。

郁治も黙つて歩いた。

郁治は突然、

「僕には君、大秘密があるんだがね」

其調子が軽かつたので、

「僕にもあるのさ！」

と清三が笑つて合せた。

調子抜けがして、二人はまた黙つて歩いた。

少時して、

「君はあの『尾花』を知つてるね」

郁治はかう訊ねた。

「知つてるさ」

「君は先生にラヴが出来るかね」

「いや」と清三は笑つて「ラヴは出来るか何うか知らんが、単に外形美として見てることは見てるさ」

「Ａの方は？」

「そんな考はない」

郁治は躊躇しながら、「ぢや Art は？」

清三の胸は少しく躍つた。「さうさね、機会が来れば何うなるかわからんけれど……今の処では、まだそんなことを考へて居ないね」かう言ひかけて急にはしやいだ調子で、

「もし君が Art に行けば、……さうさな、僕は丁度小畑と Miss N とに対する関係のやうな考で、君と Art に対するやうになると思ふね」

「ぢや僕は其方面に進むぞ」

郁治は一歩を進めた。

Ａ２　有島武郎「或る女」

二

葉子は木部が魂を打ちこんだ初恋の的だつた。それは丁度日清戦争が終局を告げて、国民一般は誰れ彼れの差別なく、この戦争に関係のあつた事柄や人物やに事実以上の好奇心をそゝられてゐた頃であつたが、木部は二十五といふ若い齢で、或る大新聞社の従軍記者になつて支那に渡り、月並みな通信文の多い中に、際立つて観察の飛び離れた心力のゆらいだ文章を発表して、天才記者といふ名を博して目出度く凱旋したのであつた。その頃女流基督教徒の先覚者として、基督教婦人同盟の副会長をしてゐた葉子の母は、木部の属してゐた新聞社の社長と親しい交際のあつた関係から、或る日その社の従軍記者を自宅に招いて慰労の会食を催した。その席で、小柄で白皙で、詩吟の声の悲壮な、感情の熱烈なこの少壮従軍記者は始めて葉子を見たのだつた。

葉子はその時十九だつたが、既に幾人もの男に恋をし向けられて、その囲みを手際よく繰りぬけながら、自分の若い心を楽しませて行くタクトは十分に持つてゐた。十五の時に、袴を紐で締める代りに尾錠で締める工夫をして、一時女学生界の流行を風靡したのも彼女である。その紅い唇を吸はして首席を占めたんだと、厳格で通つてゐる米国人の老校長に、思ひもよらぬ浮名を負はせたのも彼女である。上野の音楽学校に這入つてヴァイオリンの稽古を始めてから二ケ月程の間にめきめき上達して、教師や生徒の舌を捲かした時、ケーベル博士一人は渋い顔をした。而して或る日「お前の楽器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」と無愛想に云つて退けた。それを聞くと「さうで御座いますか」と無造作に云ひながら、ヴァイオリンを窓の外に抛りなげて、そのまゝ学校を退学してしまつたのも彼女である。基督教婦人同盟の事業に奔走し、社会では男勝りのしつかり者といふ評判を取り、家内では趣味の高い而して意志の弱い良人を全く無視して振舞つたその母の最も深い隠れた弱点を、拇指と食指との間にちやんと押へて、一歩もひけを取らなかつたのも彼女である。葉子の眼には総ての人が、殊に男が底の底まで見すかせるやうだつた。葉子はそれまで多くの男を可なり近くまで潜り込ませて置いて、もう一歩といふ所で突つ放した。恋の始めにはいつでも女性が祭り上げられてゐて、或る機会を絶頂に男性が突然女性を踏み躙るといふ事を直覚のやうに知つてゐた葉子は、どの男に対しても、自分との関係の絶頂が何処にあるかを見ぬいてゐて、そこに来かゝると情容赦もなくその男を振り捨ててしまつた。さうして捨てられた多くの男は、葉子を恨むよりも自分達の獣性を恥ぢるやうに見えた。而して彼等は等しく葉子を見誤つてゐた事を悔いるやうに見えた。何故といふと、彼等は一人として葉子に対して怨恨を抱いたり、憤怒を漏したりするものはなかつたから。而して少しひがんだ者達は自分の愚を認めるよりも葉子を年不相当にませた女と見る方が勝手だつたから。

それは恋によろしい若葉の六月の或る夕方だつた。日本橋の釘店にある葉子の家には七八人の若い従軍記者がまだ戦塵の抜けきらないやうな風をして集まつて来た。十九でゐながら十七にも十六にも見れば見られるやうな華奢な可憐な姿をした葉子が、慎しみの中にも才走つた面影を見せて、二人の妹と共に給仕に立つた。而して強ひられるままに、ケーベル博士から罵られたヴァイオリンの一手も奏でたりした。木部の全霊はたゞ一目でこの美しい才気の漲り溢れた葉子の容姿に吸ひ込まれてしまつた。葉子も不思議にこの小柄な青年に興味を感じた。而して運命は不思議な悪戯をするものだ。木部はその性格ばかりでなく、容貌――骨細な、顔の造作の整つた、天才風に蒼白い滑らかな皮膚の、よく見ると他の部分の繊麗な割合に下顎骨の発達した――まで何処か葉子のそれに似てゐたから、自意識の極度に強い葉子は、自分の姿を木部に見付け出したやうに思つて、一種の好奇心を挑発せられずにはゐなかつた。木部は燃え易い心に葉子を焼くやうにかき抱いて、葉子は又才走つた頭に木部の面影を軽く宿して、その一夜の饗宴はさりげなく終りを告げた。

二〇二四年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【修士課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦　書）

B1　石川達三「蒼氓」

一九三〇年三月八日。

神戸港は雨である。細々とけぶる春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れどきのやうに暗い。

三ノ宮驛から山ノ手に向ふ赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。この道を朝早くから幾昼となく自動車が駈け上つて行く。それは殆んど絶え間もなく後から後からと續く行列である。この道が丘につき當つて行き詰つたところに黄色い無装飾の大きなビルディングが建つてゐる。後に赤松の丘を負ひ、右手は賢澤な尖塔をもつたトア・ホテルに續き、左は黒く汚い細民街に連なるこの丘のうへの是が「國立海外移民收容所」である。

濡れて光る自動車が次から次へと上つて來ては停る。停るときしきしに詰つてゐた車の中から親子一同ぞろりと細雨の中に降り立つ。途惑ひして、標をかき合せて、あたりを見廻す。女房は顔をかしげて亭主の表情を見る。子供はしゅんと鼻水をすゝり上げる。やがて母は二人の子を促し、手を引き、父は大きな行李や風呂敷包みを擔ぎあげて、天幕張りの受付にのつそりと近づいて、へッとおじぎをする。制服制帽の巡査のやうな所員は名簿を繰りながら訊ねる。

「誰だね？」

「大泉、進之助でごぜえまし」

「何處だ？」

「へッ？」

「どこだ。何縣だ？」

「秋田でごぜえまし」

所員は名簿に到着の印をつけて、待合室で待つてゐるやうにと命ずる。父は又へッとお辭儀をして行李を擔ぎなほす。

待合室といふのは倉庫であつた。それがもう人と荷物とで一杯である。金網張りの窓は小さく、中は人の顔もはつきりしない程に暗く、寒く、濕つぽい。

「此處さ待つてれ」と父は言つて、行李を擔いで人の中を分けて入つて行くと、荷物を置く隙き間を探した。大きな棚が三段になつて幾列にも並んでゐる。女達はみなこの棚の上に坐つてゐる。男達は荷物に腰かけて煙草を喫つてゐる。妙にしんとして碌々話聲もしない。子供達が泣きもしない。憂鬱に黙りこくつて、用もないのに信玄袋を開けて見たり、手のひらを眺めて見たりしてゐるのだ。

行李を置いて出て來ると大泉さんは佇つとして戸口に立つた。ぬかるみの坂道を自動車はまだ續いてゐる。はてしもない移民の行列だ。ブラジルへ、ブラジルへ！

遠く、港が灰色にかすんで見えてゐる。その向ふには海が拡やけてゐる。そしてその海の向ふには、外國がある。つひぞ考へて見たこともない外國といふ事が今は大きな不安になつて胸を打つ。すると又しても故郷の山河を思ひ出す。故郷には傾いた家と、萎の生え揃つた上を雲が降り埋めてゐる幾段幾畝の畑と、そして永い苦闘の思ひ出とがある。しかし、家も賣つた畑も賣つた。家財殘らず人手に渡して了つた。父と祖父と曾祖父と、三つで死んだ子供と、四基の墓に思ひつきりの供物を捧げてお別れをして來たではないか。

「本倉さん、まンだきや？」女房が後から問ひかけた。ふりかへらうとした時に、拾度受付へやつて來た一團の家族を見つけて、おう、いンま來た！　と言つた。彼は漸く緊々とした微笑を浮べ、煙草を喫ふ事も忘れてゐたのに氣がついて狀に手を入れながら、頑丈な大きな肩に細く光る雨を受けて受付の方へ歩いて行つた。女房もやつと遣り場のない氣持を問ひなげられて、十三と五つとの子供達にまで「ほりや本倉のおンつあんが御座つた！」と言つた。

本倉さんとは杉の叢立ちを隔てゝ隣同士であつた。彼は大阪の親戚へ寄つたので一足後れて來たのであつた。彼は六人の家族を連れて、てんでに荷物をかついで、倉庫の入口に立つと揖いて言つた。

「おンや居だも居だも！　これや一隻の船さみんな乗れッかな？心細くねくてえかべどもしや」

「ンだ」と大泉さんも同感した。それから人々の間を掻き分けて何とか落ちつく場所を見つけると、知らない人達の肩のあひだに挟まつて行李や包みの上に腰をかけた。人いきれがむつと臭くて、雨に濡れた着物の蒸れた匂ひが鼻をついた。眼の前の棚の二段目には婆さんが坐つてゐて、鼻水をすゝつては煙管をかちかちと叩いてゐた。憂鬱さうに唇を歪めて煙草を喫つた。そしてぼんやりと傍に佇んでゐる若者に向つて、勝治仁丹持つてだか、と言つた。門馬さんの婆さんは風邪をひいてゐるのだ。勝治は隣りの若者に向つて、

「孫さ、仁丹ねえか、有つたらけれ」と言つた。孫市はまた隣りへ向いて、

「姉しやん仁丹有つたな。出してけれ」と言つた。紡績女工であつた娘の赤いお夏は、バスケットの蓋をあけた。

B2　宮本百合子「歌声よ、おこれ」

今日、日本は全面的な再出発の時機に到達してゐる。軍事的だつた日本から文化の国日本へといふこともいはれ、日本の民主主義は、明治以来、はじめて私たちの日常生活の中に浸透すべき性質のものとしてたち現れてきた。

民主といふ言葉は、あらゆる面に響いてをり、「新しい」といふ字を戴いた雑誌その他の出版物は、紙の払底や印刷工程の困難をかきわけつつ、雑沓してその発刊をいそいでゐる。

しかし、奇妙なことに、さういふ一面の活況にもかかはらず、真の日本文化の高揚力といふものが、若々しい、よろこびに満ちた潮鳴りとして、私たちの実感の上に湧きたち、押しよせてこないやうなところがある。これも偽りない事実ではないだらうか。

この感じは、新しく日本がおかれた世界の道にたいする懐疑から生じてゐるものでないことは明らかである。われわれ人民が、理不尽な暴力で導きこまれた肉体と精神との殺戮が、旧支配力の敗退によつて終りを告げ、やうやく自分たち人間としての意識をとりもどし、やつとわが声でものをいふことができる世の中になつたことをよろこばない者がどこにあらう。日本は敗戦といふ一つの歴史の門をくぐつて、よりひろく新しい世界、人類への道を踏みだしたのである。

さういふことは、すべての人によくわかつてゐる。そして、一人一人、もうすでに、外的な事情に押されながらにしろさういふ方向に爪先をむけて進んでゐる。しかも、歩きだしつつあるそれらの瞳のうちに、なにか自身を把握しきつてゐない一種の光りが見られるのは、なぜだらうか。

社会全般のこととしていへば、この数ヶ月間の推移によつて、過去数十年、あるひは数百年、習慣的な不動なものと思はれてきた多くの世俗の権威が、崩壊の音たかく、地に墜ちつつある。その大規模な歴史の廃墟のかたはらに、人民の旗を飜し、さはやかに金槌をひびかせ、全民衆の建設が進行しつつあるとはいひきれない状態にある。なぜなら、旧体制の残る力は、これを最後の機会として、これまで民衆の精神にほどこしてゐた目隠しの布が落ちきらぬうち、せいぜい開かれた民衆の視線がまだ事象の一部分しか瞥見してゐないうち、なんとかして自身の足場を他にうつし、あるひは片目だけ開いた人間の大群衆を、処置に便宜な荒野の方へ導かうと、意識して社会的判断の混乱をくはだてゐるのであるから。

自由といふ名は耳と心に快くひびくが、食糧事情の現実は、わたしどもの今日に、鐵鑵と大書してそびえ立つてゐる。開放と不安との間に、橋の架けかたを知らされずに近代を通つてきた正直な日本の幾千万の人々が、ひしめいてゐるのである。

文学が、かういふ未曾有の歴史の場面において、負つてゐる責任はきはめて大きい。そしてまた、文化・文学の活動にたづさはる人々の胸中には、言葉にあらはしきれない未来への翹望がある。それにもかかはらず、なんだか、前進する足場が思ふやうに工合よく堅くない。すべり出しの足がかりがはつきりしない感じがあるのではなからうか。自身にとつても、十分新しかるべきものと予想されてゐる日本の今日の文学を、どこから本質的に新しくしてゆけばよいのか、わかつてゐるやうでわからないのが、本当のところらしく見うけられる。

日本の文学が、今日さういふ足の萎えた状態にあることは、まつたく日本の明治文化の本質の照りかへしである。明治維新は、日本において人権を確立するだけの力がなかつた。ヨーロッパの近代文化が確立した個人、個性の発展性の可能は、明治を経て今日まで七十余年の間、ずつと封建的な鎖にからめられてゐた。したがつて、西欧の近代文学の中軸として発展してきた一個の社会人として自立した自我の観念も、日本ではからくも夏目漱石において、不具な頂点の形を示した。リアリズムの手法としては、志賀直哉のリアリズムが、洋画史におけるセザンヌの位置に似た存在を示してきた。

6/7

二〇二四年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【修士課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦　書）

（二）次の中から四題を選び、論評せよ（選んだ番号を、指定欄に記すこと）。

1 日露戦後の文学状況を、具体的な事例をあげて論評せよ。
2 関東大震災と近現代文学との関連について、具体的な作品をあげて論評せよ。
3 ヨーロッパ文学と近現代文学とのかかわりを、具体的な作品をあげて論評せよ。
4 近現代文学の発禁について、具体的な事例をあげて論評せよ。
5 明治・大正時代の新聞小説について、具体的な事例をあげて論評せよ。
6 高度経済成長期の文学の特色を、複数の作家と作品に言及しながら論評せよ。
7 近現代文学の直筆原稿の特色について、具体的な作品をあげて論評せよ。
8 美術と近現代文学とのかかわりを、具体的な事例をあげて論評せよ。
9 近現代文学研究と文学館の関係について、具体的な事例をあげて論評せよ。
10 近現代文学にかかわる近年の資料、または近年刊行された研究書のうち、あなたが重要と思うものを一つ（以上）とりあげ、なぜそう考えるか論評せよ。

受験番号	
氏名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

日本語日本文学

総点

——ここから記入すること——

問題一

入学後に専攻する専門領域を○で囲め。古典文学領域については、〔　〕内の該当する時代等、ならびに散文・韻文にも○を付すこと。

日本語学領域

古典文学領域　〔上代・中古・中世・近世・和漢比較文学　／　散文・韻文〕

近現代文学領域

問題二

解答の冒頭には、それぞれ選択した問の記号（例　A1）を明記すること。

（裏へ続く）

（裏面へ続く）

――――これより先の余白には絶対に記入しないこと――――

ここから記入すること

問題三　Ⅰ日本語学領域／Ⅱ古典文学領域　（選択した領域を○で囲め）　※間いの番号や選択した記号を適宜明記すること。

——これより先の余白には線枠に記入しないこと——

ここから記入すること

問題三　三　近現代文学鑑賞

（一）A1

（一）A2

(1) B1

(1) B2

——これより先の余白には線枠に記入しないこと——

——にしたがって記入すること——

(二) (　　)

(二) (　　)

(11) (　　)

(11) (　　)

——これより下の余白には線枠に記入しないこと——